

“境界領域”のフィールドワーク (3)

——生存の場としての地域社会にむけて——

新 原 道 信

Fieldwork on “The Liminal Territories” (3) : Toward Reconstructing Regions and Communities for Sustainable Ways of Being

Michinobu NIIHARA

This article evolved from a research project called “Exploring Regions and Communities for Sustainable Ways of Being” which is a part of the European Research Network’s activities at the Institute of Social Sciences, Chuo University. The project is based on the idea that reconstructing, against the tide of globalization, a social system for “codevelopment” is urgent and crucial for the 21st century planetary society, in which the multiple problems concerning exclusion and inclusion are increasingly frequent. Throughout the project, I have sought to clarify the ways in which “wisdom for codevelopment” is lived or embodied in so-called “borderlands” or “liminal territories,” in which the varieties of local residents try to coexist while conflicting, merging, and intertwining with one another. Under such objectives, I conducted research and interviews in certain areas, regarding the autonomy and independence of such localities, the global inter-cooperation among the communities, and the composite/complex/hybrid identities of the community residents, while employing such key concepts as “metamorphosis” and “liminality.” The article reflects on the epistemology developed from my fieldwork and research experience and submits a theoretical framework for conceiving and coping with the ongoing problems. In that, the article sets out a preliminary exploration for what might be called “cumscientia (humanities) at moment of crisis.”

来る日も来る日も、私たちは慣習的な行動をとり、外的 (external) であったり私的 (personal) であったりするリズムに合わせて動き、数々の記憶を育み、将来の計画を立てる。そして他の人々も私たちと同じように日々を過ごしている。日常生活における数々の体験は、個人の生活の単なる断片に過ぎず、より目に見えやすい集合的な出来事からは

切り離され、私たちの文化を揺るがすような大変動からも遠く隔てられているかのように見える。しかし、社会生活にとって重要なほとんどすべてのものは、こうした時間、空間、しぐさ (gestures)、諸関係の微細な網の目のなかで明らかになる。この網の目を通じて、私たちがしていることの意味が創り出され、またこの網の目のなかにこそ、センセーショナルな出来事を解き放つエネルギーが眠っている。A.メルッチ『プレイング・セルフ——惑星社会における人間と意味』[イントロダクション]¹⁾

1. 研究の目的・背景と本稿の位置付け——“境界領域”のフィールドワークの「エピステモロジー／メソドロロジー」

本稿は、中央大学社会科学研究所の研究部門の一つであるヨーロッパ研究ネットワークの活動の一環としてすすめてきた調査研究プロジェクトである[“探究／探求型社会調査 (Exploratory Social Research)”による“境界領域”のフィールドワーク]の成果の一部である²⁾。本稿はまた、これまでの共同研究の成果を継承発展させることを意図して開始される新規プロジェクト「惑星社会の諸問題に应答する探究／探求型社会調査——3.11以降の“生存の場としての地域社会”形成に向けて (Exploratory Social Research on the Multiple Problems in the Planetary Society: Toward Reconstructing “Regions and Communities for Sustainable Ways of Being” after 3.11)」の出発点を確認することを目的としている。

本研究の「エピステモロジー」となっているのは、筆者がイタリアの平和運動、とりわけ「緑」の運動を調査研究するなかで師友となった、A.メルッチ (Alberto Melucci) の“惑星社会の諸問題 (the multiple problems in the planetary society)”，そしてA.メルレル (Alberto Merler) の“社会文化的な島々 (isole socio-culturali)”という理論的なメタファーである。ここでの理論的メタファーとは、「グローバルな英語的現象」や「リング・フランカ (共通語)」としての分析装置というよりも、「私たちが既に身につけている視点をずらし、関係のつらなりをつかみ取ったり、体験をくりかえし束ねたりすることが可能になるような、もの見方」である³⁾。

この「エピステモロジー」との相互運動として立てられた「メソドロロジー」である“探究／探求型社会調査”は、メルレルそしてメルッチ夫妻のそれぞれとの間でなされた試みである。メルレルとの間では、地域社会形成とかかわる“コミュニティを基盤とする参加型アクション・リサーチ (Community-Based Participatory Action Research (CBPR))”，メルッチ夫妻の間では、個々人の間の関係性構築とかかわる“療法的でリフレクシヴな調査研究 (Therapeutic and Reflexive Research (TFR))”を錬磨してきた⁴⁾。

「エピステモロジー／メソドロロジー」双方の生成と錬磨を企図しつつ行われた地中海、ヨーロッパ、南米、大西洋、アジア・太平洋と日本の地域社会での「境界領域」のフィールドワー

ク」は、当初は、“テリトリーの境界領域”——国家が引く境界線の突端，“端／果て（*punte estreme/finis mundi*）”に位置する存在であると同時に、ひとつの国家から見るなら「他者」、時には前人未踏の地（*no-man's-land*）である場所へと境界をこえて行き来する領域——を対象としてすすめられた。しかしこの調査の進行過程で、一見、地理的・客体的な問題設定が、実は個々人の身体に刻み込まれた——個々の内なる“深層／深淵”，間主観性，精神の境界の問題性を伴っていることに気付かされた。すなわち，“心身／身心現象の境界領域（*liminality, betwixst and between*）”である⁵⁾。

メルッチは，“テリトリーの境界領域”と“心身／身心現象の境界領域”とが“衝突・混交・混成・重合”するという事態，現代という時代の“移行，移動，横断，航海，推移，変転，変化，移ろいの道行き・道程（*passaggio*）”の固有の特徴を、「深いところでの不可逆的な変化の連続」，すなわち“時代のパサージュ（*passaggio d'epoca*）”としてとらえた。「変化に対する責任と応答を自ら引き受ける自由（*a freedom that urges everyone to take responsibility for change*）」が現代人に求められる「新しい質」の自由であるとしたメルッチが2001年に夭逝した後，私たちは、「9.11」から継起する「アフガニスタン」「イラク」「世界金融危機」，さらに「3.11」と，“惑星社会の諸問題”の全方位的な展開——持続する危機のなかで、「生活」のみならず“生存の在り方（*Sustainable Ways of Being*）”にまで問いが遡り，わが身にとって「焦眉の問題（*urgent problem*）」の意味と構造を問い直さざるを得ない状況——に直面しつづけている⁶⁾。

“見知らぬ明日（*unfathomed future, domani sconosciuto*）”⁷⁾——私たちは，事故や災害，病気や死に直面したとき，たった一人で“異郷／異教／異境”の地に降り立つような感覚を持たざるを得ない。突然すべてがストップし，景色もにおいも変わり，味覚も違う。道を行き交う人たちの談笑に妙ないらだちを感じ，ただオロオロする。ただ，ただ祈る。気持ちは荒れ野をかけめぐりつつ，身体をこの場に置き，自分の無力を痛感し，はじめて本気で，かたわらにいる生身の人間を必要とする。

ごくふつうの人間は，“見知らぬ明日”をどう生きるのか。仕事や結婚や出産・子育て・介護・看取りといった「生老病死」とかかわる日常生活は，いまや“惑星社会の諸問題”を無視しては成り立たない。“境界領域”のフィールドワークは，“惑星社会の諸問題”をどのように引き受け／応答するのか。「身近な問題」の背後に在る“惑星社会の諸問題”を認識し，自らの限界や制約を引き受け（*responding for*），社会関係のフィールドに対して応答する（*responding to*）こと，「多重／多層／多面の問題を引き受け／応答する（*responding for/to the multiple problems in the planetary society*）」しかない。

以下では，これまでの調査研究の流れ（“テリトリー”と“心身／身心現象”から“時代のパサージュ”への着目）をふまえて“生存の場としての地域社会の探究／探求”の準備をすすめ

ていきたい。

2. メルッチとメルレルによる「“生存の在り方”をめぐるとの見直し」の解読

「3.11以降」、私たちは、原発・震災問題も含めた複合的な困難、メルッチが『プレイング・セルフ』の第9章「地球に住む」で言及した「複雑性のもたらすジレンマ」がもたらす多重／多層／多面の困難に対する「答えなき問い」を発し続けている。「環境・エネルギー政策」「被災者支援」等々、異なる諸要素をひとつに整理し理解・対処せざるを得ない状況の一方で、「内なる異質性」の問題が顕在化したコミュニティに暮らす個々人は、“生身の現実”への苦渋と創意工夫に満ちた応答が求められている。こうした「地域社会の解体と再編」の問題を抱える被災地と、「高齢化・無縁化」などの問題を抱える大都市圏公営団地との関係に着目し、日本とイタリア（ミラノ、サッサリ、トリエステなど）の共同研究者と連絡をとりあいつつ新規プロジェクトに着手した⁸⁾。この「3.11以降の“生存の場としての地域社会”形成」に向けてのプロジェクトのなかで、現在進行形で対面しているのは、個々人のなかに生起しつつある“毛細管現象（fenomeno della capillarità）”——Ways of living（「生活」や「生き方」）だけでなく、Ways of being（「いのち」さらには“生存の在り方”）という観点にまで及ぶ価値観の見直しである⁹⁾。このフィールドでの知見とともに想起されたのは、メルッチとメルレルのそれぞれによって既に提示されていた「“生存の在り方（Sustainable Ways of Being）”をめぐるとの見直し」を理解するための「導線」であった。

メルッチは、複雑性と差異によって成立している現代社会を生きる個々人が、時間や空間、健康や病気、性や年齢、生や死、生殖／再生産や愛といった自己を形成する諸次元で、遊び（play）——すなわちゆるく固定されたピボット・ピンのように揺れ動かざるを得ない現代人の条件を主著『プレイング・セルフ』のタイトルとしたうえで、「惑星社会における人間と意味」をサブタイトルとした。「個人の行為に対して可能性に開かれた沃野を提供してきた近代世界」の「システムはもはや不可逆的な勢いで惑星全体を包摂するようになり、未来の見通しはカタストロフの恐れで被われていることから、数々の救済神話をもつ楽観論は、根本から成り立たなくなっている」。そして私たちの私生活は、「社会的行為のためのグローバルなフィールドとその物理的な限界という、惑星としての地球の二重の関係」によって規定されてしまっている。それゆえ、「惑星としての地球に生きていることの責任と応答力」がごくふつうの個々人に託されるような現在の「惑星社会（the planetary society）」においては、「日常生活における数々の体験」「諸関係の微細な網の目」のなかで意味が創り出され、同時代の集合的現象さらには深部からの社会変動がもたらされるとした¹⁰⁾。

可能性と制約のなかで生きるものの〈内的で微細な変化／他者との交感／集合行為〉のプロセス——すなわち、「集合的な出来事」や「私たちの文化を揺るがすような大変動」から「遠

く隔てられ」たように見える個々人の“心身／身心現象 (fenomeno dell'oscurità antropologica)”さらには“個々人の内なる社会変動 (metamorfosi nell'interno degli individui corporeali)”に、メルッチは、社会そのものを、“深淵 (abyss, abisso)”“深層 (obscurity, oscurita)”から見直す“基点／起点 (anchor points, punti d'appoggio)”を見出そうとしたのである¹¹⁾。

「社会文化的な“島々のつらなり (la rete dei rapporti interinsulari)”が社会の諸要素を結びつけるための重要な“境界領域”となり得る」とするメルレルは、可視的なシステムを静態的に分類・整理するのではなく、いくつもの異なった特殊性の衝突と相互浸透によって形成されつつあるダイナミズムとして現代社会を理解しようとした。「グローバル化」がもたらす社会の複雑化は、その「明晰」にしてシステムティックな「社会の複雑性 (complessità sociale)」のゆえに、あくなきシステム化からすり抜け、染みだし、内部から異化するところの“混交し混成する重合性 (compositezza)”の潜在力を、かえって増大させる。異なる諸要素をひとつの平面上に規格化し整頓し保存・補完しようとする力が働けば働くほど、そこで生じる（「複雑さ」や「多様性」として当面は理解される）現象そのものの力によって、その社会がもつ重合性、混交し混成する重合性の諸側面、社会文化的島々のつらなりから構成されているという事態に直面せざるを得ない。そこで求められるのは、自らとは異なる理解のあり方で世界を見る力をもった他者の存在を知覚し (percepire), 理解しようとして、決して単線的には成立しえない対話の可能性を探り続ける力、それぞれの“複合的”な体験を、脱色し単線化することなくそのものとして受けとめようとする力である。このような意味での“島々のつらなりのコミュニケーション (la comunicazione inter-insulare)”は、個々の人間文化の生物多様性に根ざして形成される社会の礎となり得るものなのだとした¹²⁾。

両者に共通するのは、システム化された社会の“境界領域”で生起する「動きのなかの」“不均衡な均衡 (simmetria asimmetrica)”, “継ぎ目や裂け目 (giunture e spaccature)”への繊細さと、“ごくふつうのひとびと (la gente, uomo della strada, ordinary simple people)”が持つ“偏ったトタリティ (totalità parziale)”へのきめ細やかな関心である。そこでの同時代認識と人間理解はおおよそ以下のようなものであった。すなわち、現代人は、情報化・知識化・グローバル化の網の目のなかで、“境界線の束としての身体 (corpo della catena dei confini)”を持つ自己の多重／多層／多面性を自覚し、「自我やアイデンティティの一貫性」からずれて、はみ出し、“境界領域を生きるひと (gens in cunfinem)”とならざるを得ない。「センセーショナルな出来事」のみならず個々人にとっての危機である「生老病死」も含めて、私たちの日常生活は、“未発の瓦礫 (macerie/rovine nascenti)”に満たされている。「複雑性のジレンマ」がもたらすところの個々人の内なる“痛み／傷み／悼み”は、「澱み」となって沈殿し、ある日突然発火し噴出する。“現在の危機／危機の現在”を生きる個々人は、その“生存”の危機に際して、揺れ動き、震えおののき、“見知らぬ明日”の渦中で、「プレイング・セルフ」として生き

ることを身体で覚えてゆくかもしれない。これが、個々人に、そして集合的に起こる“未発の毛細管現象／胎動／交感／社会運動 (movimenti nascenti)”であり、“境界領域”の第三の側面である“メタモルフォーゼの境界領域”が現象する条件となっている¹³⁾。

しかし、メルッチとメルレルのこのような同時代認識と人間理解は、他の論者との間に接点を持つものなのだろうか。それを見ていくこととしたい。

3. R. ベラーの「公共哲学としての社会科学」

メルッチやメルレルの試みもまたそうであるように、“見知らぬ明日”に直面した時代にはいつも、時代そのものを“大きくつかむ新たな学問が求められる。そこでは既存の枠組みを組み替え補助線を引き直す“領域横断力／突破力 (Einbruchskraft)”が必要とされる。個々の小さな場にふれて、汚れつつ、その場の意味を、一見隔絶されているように見える他の小さな場の意味と比較しつつ、なにをどう考えるのかというところから考えるということ。つまりは、単一の基準によって構築された推論の同心円的拡大によって外界を規定し他者を支配するのではなく、移動し、(自らとも／自らの内でも) 対位し、対比・対話しつづけるという力である。

古城利明は、政治学者のJ. バートルソン (Jens Bartelson) の分類にならって、グローバリゼーションの特徴を、「既存の単位間でのものごとの移動・交換 (transference)」 「システム・レベルでの変容 (transformation)」 「単位やシステムを成り立たせる区分の超越 (transcendence)」としたうえで、地域社会学講座第二巻の眼目を、「『変容』あるいは『超越』の視点から、グローバリゼーションに伴うローカルの『再審』を問うことにあるとした¹⁴⁾。そこで、以下では、アメリカの宗教社会学者R. ベラー (Robert N. Bellah) によってなされた問題提起——「移動・交換」のレベルでの再調整を企図した政策提言では「対処」しきれない現実に対する社会と学問そのものの「変容」から「超越」を企図した議論に目を向けたい。

現代アメリカの私的・公共的性格をめぐる中産階級の言語と道徳的推論に関心をもったR. ベラーたちの研究グループは、「共通の関心をめぐるの同胞市民との対話ないしは会話」「能動的なソクラテス的なインタビュー」による共同研究の成果である『心の習慣』のなかで、方法論的な補遺として、「公共哲学としての社会科学」という付論を設けた。同研究は、専門家たち (community of the competent) のみならず公衆を、対話の世界に引き込むことを目指し、preconception や問いを会話に持ち込み、答えを聞き出しながら、それを言語に現れた面のみならず、出来る限り話し相手の人生 (実生活) のなかで理解するようにこころがけ、話し相手が暗黙のままにしておきたかったかもしれないものを浮かび上がらせようと試みた。この付論においてベラーたちは、およそ以下のような「エピステモロジー／メソドロギー」を提起していたと理解し得る。

専門科学は、単一の変数の抽出を理想とする、還元主義的な形態、全体の存在を否定し社会をばらばらの個人と集団の集積物と見る。全体への責任、他の部分についての責任を負わない個別科学から、社会科学をいまいちど学問へと復権させたいと考え、総観的(synoptic)な見方、古い伝統、トクヴィルのような「人文学愛好家(humanistic amateur)」の“智”を再評価する。そこでは、データの収集と活用という観点から不備を随伴していたとしても、社会全体に対する認識、家族、宗教、政治、経済の相互の結びつき、社会と国民性との相互影響関係についての認識の深さがある。哲学的な社会科学は、実質的な伝統へのコミットメントに基礎をおいて社会を理解しようとする。個々の事実は、全体についての概念に形と輪郭を与えることのできる準拠枠のもとで解釈される。これは、学際的な研究によってこと足りるものではなく、学科や分野相互の境界、とりわけ人文科学(文化的伝統の継承と解釈)と社会科学(純粹観察という特権的地位をもつ)という恣意的な境界をこえることを必要とする。それゆえ、公共哲学としての社会科学は、社会自身の自己理解あるいは自己解釈の一形態となる。つまり、社会の伝統、理想、願望と現在の現実と並置する。公共哲学としての社会科学に携わるものは、学者が語る物語と社会一般に流通している物語とを結びつけ、両者を相互的な討論と批判にさらすよう努力する。公共哲学は「価値自由」ではありえない。こうした調査の途上では、社会の理解と自己理解、調査結果の分析と道徳的な推論とが同時に起こり、調査者は彼が研究している社会の伝統との間に折り合いをつけねばならないのである¹⁵⁾。

ベラーたちの「哲学的な社会科学」に関する根本的考察は、「分析知」ではとらえきれない(もっと言えば「誤って」とらえてしまいがちな)“生身の現実(cruda realtà)”を、“大きくつかむ(begreifen, comprendere)”ことを要求している。「純粹観察という特権的地位」から立ち位置をずらし、個々人の“知覚(percezioni, Wahrnehmungen)”と学者の分析との関係を結び直すことの「折り合い」を付けようとするのである。この問いかけは、「文化的伝統の継承と解釈」を旨とする人文科学の側からのE. サイド(Edward W. Said)の「傷つきやすさと整合的な議論の組み合わせ(combination of vulnerability and rational argument)」という“かまえ(disposizione)”とも共鳴するものであろう¹⁶⁾。

ここでの学問とは、特定の状況、とりわけ最悪の状況においてのみ力を発揮する“臨床・臨場の智(cumscientia ex klinikós)”であり、最悪の状況でもたたかうための武器としてのみ意味をもつ。既存の知とは別の補助線をひき、対立の場の固定化を突き崩し、揺り動かす。日々の行動のなかの小さなズレ、ちょっとした不具合(piccoli mali)や兆候(seni)のなかに現象する“未発の毛細管現象/胎動/交感/社会運動”を丹念に掬い取るには、「ある種のフィルター」のような理論が必要であり、「私たちが既に身につけている視点をずらさねばならない

(we must alter our point of view)¹⁷⁾。この「多重／多層／多面の自己のメタモルフォーゼ」、自己の“生存の在り方”の見直し (ways of living から ways of being にかけての意味の産出) を理解し把握するためには、理論と臨場・臨床 (実践)、社会学、心理学、民俗学、人類学、歴史学、考古学、生態学、脳科学など他の諸科学、複数のことがら／もの見方の“境界領域”を横断していくような学問である。だとすると、この問題提起への応答は、部分的な「解答」や「意見」ではなく、おおもとで受けとめる (識ることの恐れを抱くことがらをあえて境界を越えて選び取ることから始める) しかない。考察は、「移動・交換」と「変容」、さらには、「単位やシステムを成り立たせる区分の超越」という難解さへと向かうこととなる。

4. J. ガルトウングの問題提起

経済学者 E.F. シューマッハー (Ernst Friedrich Schumacher) の後継者としてシューマッハー・カレッジを運営する思想家 S. クマール (Satish Kumar) が編集した *The Schumacher lectures. Vol.2* には、平和研究者 J. ガルトウング (Johan Galtung) の *Sinking with Style* (「優雅に品よく没落を」) という論考が収録されている。1984年に刊行された同書は、翌年の1985年、シューマッハーの「スモール・イズ・ビューティフル」に賛同し和歌山県那智勝浦町で有機農業を実践する耕人舎グループによって翻訳されダイヤモンド社より、『シュマッハーの学校——永続する文明の条件』というタイトルで刊行されている。ここでガルトウングは以下のような問題提起をおこなっている。

「危機」とは誰にとっての危機か。それはあくまで、第三世界との貿易に深く依存した「西洋帝国主義」にとっての危機なのであり、西洋以外の国々が、「世界資本主義システム」というゲームをよりうまくこなしていくようになっているだけだ。西洋社会が、市場での競争力を確保するための高い生産性を追求した場合、そこにはおよそ以下のようなコストが存在している。第一に、官僚・経営者・研究者というテクノクラート (資本あるいは「問題」の管理者、「問題」を処理して解決方法を見つける専門家) の複合体が管理する社会となること。既得権益を占有する階層を中心にこの体制を維持するために必要とされる人間は、高生産性が必要なことは理解するが、「国際政治、歴史、文化、自然、人間」についての理解を欠くことが「出世の条件」となる。第二に、少数の官僚・経営者・研究者によって管理・保護されるそれ以外の人間には、「強制的自由時間、非自発的余暇、無意味な労働」がもたらされ、能力の実現と人とのつながりが奪われる。第三に、システムの「周縁部 (margin)」でなく中心部における「ストレス」と「汚染」(身体が受け付けない化合物) がもたらされることによって、精神障害、心臓疾患、悪性腫瘍といった「文明病」に直面する。

これらのコストをもたらす「必然的に没落へと至る内なるプログラム (an inner programme that should be implemented) の背後には、①中心と辺境という空間概念、②進歩や成長の概念(時間概念)、③知識の概念化(複雑な問題を操作可能な単位にまで「X-Y関係」に還元し、演繹関係に基づく知的ピラミッド造り)、④人間と自然との関係における人間中心主義、⑤白人・男性の優越、垂直的統治、⑥普遍的かつ排他的な存在、唯一の中心といったコスモロジーが存在している。すなわち、「成長の観念」「知識体系化の方法」「自然との関係を組み立てていくやり方」(the idea of growth, the way we organize our knowledge, the way we organize our relation to Nature)や「他の民族、他の性、他の年齢集団との関係を組み立てていくやり方」(the way we organize relations to other peoples, to the other sex, to other age-groups)と、西欧的宗教への信条との間には、「内的一貫性(an inner consistency)」が存在している。この問題の立て方を根本から組み直すために、危機の二つの側面、すなわち、「危険」であると同時に「機会」としてとらえ、「緑」の潮流やポーランドの協同組合のなかに萌芽としてあらわれている「第三世界との共存、第三世界への輸出競争の断念、自然の尊重、より低いレベルの生産、職人的・労働集約的・創造性集約的な生産の試み(どの分野でなら生産性を下げることができるのかの議論とともに)などに注目する。「皆がもっと手仕事をする(more manual work all of us) / 物質的豊かさの限界を自覚する / 予測困難なパターンの未来(a less predictable pattern for the future) / 決まり切ったライフ・サイクルからはずれた生活を営む可能性(more possibility of organizing life with a less tidy life-cycle) / 自家消費のための生産、物々交換のための生産、生活必需品を選ぶのに最低限必要な貨幣に交換するための生産」を試みるという可能性を提示し、「仏教的宇宙観」という言葉とともに論考を結んでいる¹⁸⁾。

この論考は、ガルトゥング本人が日本語版のために7本の論考を選んだ著作である『グローバル化と知的様式』¹⁹⁾がもつ「実践志向性」と「根底的批判性」の“基点/起点(anchor points, punti d'appoggio)”となっているものだと考えられる。とりわけ、高度生産性を持つ社会に固有の「コスト」としてあげられている「精神障害、心臓疾患、悪性腫瘍といった文明病」に関する指摘は、メルッチの“生体的関係的カタストロフ(la catastrofe biologica e relazionale della specie umana)”の議論とほぼ重なっている。そしてまた、テクノクラート複合体の一部を構成し、the way we organizeの担い手となってしまっている研究者が、Ways of Beingをとらえなおすことの困難さについての自覚と、それに対する乗り越えの方向として、「驚きと遊び(wondering & playing)」をあげたメルッチの『ブレイング・セルフ』の終章「驚嘆することへの讃辞」とも重なってくる。“[時代の]裂け目(spaccatura d'epoca/epoca di spaccatura)”に着目しつつ、「手仕事」や「予測困難なパターンの未来」、そして同じorganize

でも「決まり切ったライフ・サイクルからはずれた生活」をorganizeするというガルトウングの提案は、メルッチの言うところの「循環し、迂回していくような道筋」、私たちが既に身につけてしまっている視点から“ぶれてはみ出し (deviando, abweichend)”, 「関係のつらなり」をつかみなおす試みを想起させる²⁰⁾。

すべてを「計量」の対象とする社会システムに、なしくずし的に加担していく私たちの生活の在り方を問い直し、社会経済システムをデザインしなおすことを企図するS.クマールは、「いま、ここにいる (being here and now)」ことを、その未来学の根幹に据える²¹⁾。大地にふれ、地球を感じ、そこから学ぶ。ゆっくりと歩くことで哲学が試される。感謝しつつ歩く。その視線のなかにある新たなシステムを“創起する動き (movimenti emergenti)”は、むしろコンクリートの巨大都市を歩くときに発揮される。「土」と「謙虚」はhumilisという共通の語源から来ている。Being, 在ること／居ること。ある特定の場に居る“智慧”としての“臨場・臨床の智 (cumscientia ex klinikós)”である。

単線的・効率的に、目的を求めて迅速に歩くのではなく、「巡礼者 (pilgrim)」のように「いま、ここに在る／ここに居ることから始まる未来」を感じ取ろうとしつつ、大地への感謝とともに巡礼するという「理念」は美しい。しかし、私たちのなかに“埋め込まれ／植え込まれ／刻み込まれ／深く根をおろした (radicato)”「矢印」の構造は、単線的・効率的な「救い」を構築する方向へと動いていく。私たちは、より効率的に、苦労やリスクの少ない方向で、「目的などない歩き方」を求めてしまうというイロニーへと向かう心性を抜きがたく持っている。とりわけガルトウングが指摘しているような、「①中心と辺境という空間概念、②進歩や成長の概念 (時間概念)、③知識の概念化」を非意識的前提とした「独断」への道をできる限り回避することは出来るのか？「迅速さへの脅迫観念・誘惑」という“縛られた人間の固執観念 (obsession/ossessione/obsessio)”から少しでも「自在」な「プレイング・セルフ」で在るためにはどうしたらよいのだろうか？

5. 生存の場としての地域社会にむけて——“危機の時代の総合人間学”

“危機の時代の総合人間学”——実はこれが“探究／探求型社会調査 (Exploratory Social Research)”による“境界領域”のフィールドワーク”を通じて獲得された“知覚 (keeping perception)”である。「変容」「超越」の視点からの「グローバリゼーションに伴うローカルの『再審』」は、“生存の在り方 (Sustainable Ways of Being)” “生存の場としての地域社会 (Regions and Communities for Sustainable Ways of Being)” から組み直さざるを得ない。すなわち、“ごくふつうのひとびと”が“生存の在り方”そのものの危機に際して“メタモルフォーゼ”しつつ生きることを身体で覚えていこうとする、この行為と意味を理解する側の学問もまた、“メタモルフォーゼ”が必須となる。この流動性のなかで、“基点／起点 (anchor points,

punti d'appoggio)”となるのが、“生存の場としての地域社会”である。

私たちが、一人の人間として、“惑星社会の諸問題を引き受け／応答する”ためには、なにをどこから始めればよいのか。私たちは、いままさに顕在化している「分断」「社会的排除」「異なる他者」への「非寛容」といった“圧倒的な現実”に押し流されつつも、その流れを少しだけずらし、不協和音を発しつつ、「ただ在る」ことの意味を噛みしめ、いくつもの世界の見方、応答の在り方、他者との関係のつくり方を生み出す“時代のパサージュ”のなかにある。

現代の危機は、人間が生み出したプログラムであるシステムの「統治性の限界 (the Limits of Governmentality)」に起因している。プログラムを生み出すプログラムを創出した人間は、自らの閉じた定常系のシステムを破壊する／革新するというアンビヴァレンス (ambivalence) を抱えることになった。人間は「例外則」によって進化する。しかし、中立化し得ない装置としての国家は、例外を排除する。拡大された身体としての国家が機械化 (官僚制化) していく。システム化された社会は、大量で高エントロピーの廃棄物 (ゴミ) を生み出す。しかも、機械化 (官僚制化) の一方で、権力の問題は残されたままで、中立化は実現しない。権力は、自らの「統治性の限界 (the Limits of Governmentality)」を認めようとせず、その原因を「統治不能なもの (the 'ungovernable')」の側に求め“異物 (corpi estranei)”の根絶・排除へと向かう。人間同士の“交感／交換／交歓 (scambio, Verkehr)”は可能であるとしても、人間とシステムの間には、「統治性の限界 (the Limits of Governmentality)」がある。異端排除と英雄待望による、“人間の内面崩壊／人間の亀裂 (degenerazione umana/spaccatura antropologica)”へと向かわないために、人間同士の“共感・共苦・共歓 (compassione)”を基盤とする“聴くことの社会学 (sociologia dell'ascolto)”という“想起／創起”が、メルッチから託された。

メルッチが言うように、“惑星社会の諸問題”は、首相や大統領になったからといって「解決」できるものではなく、むしろ様々な部署に配置されている「専門家」や「権威者」たちの「ちょっとした過ち」によって、社会に決定的な断裂をもたらす可能性を有してしまっている。地域社会の“深層／深淵”に位置する、個々人の“心身／身心現象”における“草の根のどよめき”に応えるべき制度やシステムは、これから構築していくしかない。制度が非在の場合には、“想像／創造の力 (immaginativa / creatività)”によって実質を“創起する動き (movimenti emergenti)”，無数の“草の根のどよめき”が必要となる。「そのなかで自分の立場はどういうものなのだろうか」などと考えることもなく、「一粒の麦」として「いてもたってもいられない」ことを、「ガルゲンフモール (Galgenhumor)」とともに「せっぱつまって」やる。惑星社会は、そうしたひとたちの“無償性／無条件性／惜しみなさ (gratuitousness, guratuità)”から何かが生まれる可能性を増大させる。

“生存の在り方”“生存の場としての地域社会”に向けられた学問、メルッチは、このような

学問の方向性を、「惑星人の新たな地図 (nuove mappe del pianeta uomo)」というメタファーで言い表していたが、いま名付け直すのだとしたら、それは、“危機の時代の総合人間学 (una ‘cumscentia’ nel momento della crisi antropologica)”ということになるろう。

社会が新たな局面に突入しているまさにその瞬間に、自らの設定した領域そのものを突き崩す形で“メタモルフォーゼ”をしていく。新たに始める初発の段階では、方法も概念も十分に精緻なものであるというよりは、多少の穴はあっても事実に入り込んでいることにこそ、その存在意義を見出す学問である。その意味においては、ありあわせの道具であっても、材料や準備の不足を、創意工夫で補ってやりくりをする力、欠如を恐れず、その限定された条件の中にあって、すべてについてなにごとかを識ることを求め続けることによって命脈を保つという点で、“メタモルフォーゼ”を生命とする学問である。

そのために、まず、ひとまずは未知の事実に驚く。しかし、そうかといって、パニックにもならず、この驚きを受け流し「看過」するのでもなく、「すっと」「理解したつもり」になって「迅速」に「対処」するのでもなく、なぜそれが、どのように造り出されたのかを、やわらかく、深く、探求していく。現在の「事件」は、いかなる過去の現実と絡み合って構成されているのか、現在がいかなる系譜によって成り立っているのか、ゆっくりとはやっつけられない、差し迫った状況で、あえて、(出来るだけ早めにパニックの部分は出し切ってから、気持ちだけでも) ゆっくりと“探究／探求”する。こまめに小さな事実を集めながら、すぐには結論を出さず、何度も解釈・再解釈し、その度ごとに暫定的だが、全身全霊を賭けるつもりでの判断を重ね、生身の現実を理解するための自前の言葉を蓄えていく。これが“探究／探求の技法 (arti di ricerca/esplorazione, Art of exploring)”として求められるものである。“低きより (humility, humble, umilta, humilis) をもって、高みから裁くのではなく、地上から、廢墟から)、多重／多層／多面の“境界領域 (cumfnis)”を歩き、日常生活の中に脈打っている様々な「知覚 (Wahrnehmungen)」、すなわち“記憶”や“経験”として、沈殿し、折り重なっているところの「真実 (Wahr)」を受け取ろう (nehmen) としつづけていくのである。

形を変える (changing form) には、変化の流動性、保持しながら喪失を受容する能力、リスクへの寛容、限界を見極める分別が必要である。西洋の近代的体験を条件づけてきた冷淡で計算高い合理性は、こうした要請に向いていない。新しい質が必要であり、私たちはまさにいまそれを学び始めている。破裂することなくひとつの形から別の形へと移り変わっていく、予報できない断片をひとつに束ねていく、そのためには、直観力と想像力を必要とする。……喪失も展望もないメタモルフォーゼなど存在しない。人が形を変えていけるのは、自己の喪失を進んで受け入れ、好奇心を持って想像をめぐらし、驚きをもってしかし恐れることなく、可能性と出会える不定形な領域に入り込んでいこうとする、そん

なときだけだ。A.メルッチ『プレイング・セルフ——惑星社会における人間と意味』第三章「多重／多層／多面の自己のメタモルフォーゼ」²²⁾

注

- 1) Alberto Melucci, *The Playing Self: Person and Meaning in the Planetary Society*, New York: Cambridge University Press, 1996 (=新原道信・長谷川啓介・鈴木鉄忠訳『プレイング・セルフ—惑星社会における人間と意味』ハーベスト社, 2008年, 1ページ)より。
- 2) フィールドワークは, サルデーニャ, 沖縄・奄美, 広島, 長崎, 北海道, コルシカ, ケルン, エステルズンド, コペンハーゲン・ロスキルド, サンパウロ・リオデジャネイロ・エスピリトサント, 川崎・鶴見, 石垣, 竹富, 西表, 南北大東島, 対島, 周防大島, マカオ, 済州島, サイパン・テニアン・ロタ, リスボン・アゾレス, カーボベルデ, ヘルシンキ・ミッケリ・オーランド, ヴァッレ・ダオスタ, トレンティーノ=アルト・アディジェとイタリア・スイスの間国境アルプス山間地, フリウリ=ヴェネツィア・ジュリアとゴリツィア/ノヴァ・ゴリツィア, トリエステからイストリア(イタリア・スロヴェニア・クロアチアの間国境地域)などでおこなってきた。本稿は, ヨーロッパ研究ネットワークと科学論フォーラムの共同プロジェクトの成果である古城利明編『リージョンの時代と島の自治』中央大学出版部, 2006年を始めとして, 筆者を研究代表者に, 古城利明, 中島康子, 柑本英雄, 中村寛, 鈴木鉄忠等が参加した科学研究費による共同研究「21世紀“共成”システム構築を目的とした社会文化的な“島々”の研究」(2004年度から2006年度), 「国境地域と島嶼地域の“境界領域のメタモルフォーゼ”に関する比較地域研究」(2007年度から2009年度), 筆者の2010年度イタリア・サッサリ大学での在外研究, 2011年度以降の「3.11」に対する取り組みのなかに位置づけられる。フィールドワーク全体の流れについては, 新原道信『ホモ・モーベンス—旅する社会学』窓社, 1997年と新原道信『旅をして, 出会い, とともに考える—大学ではじめてフィールドワークをするひとのために』中央大学出版部, 2011年を参照されたい。これらのフィールドからの成果としては, 新原道信「境界領域のヨーロッパを考える—移動と定住の諸過程に関する領域横断的な調査研究を通じて」『横浜市大論叢』人文科学系列, 第60巻, 第3号, 2009年, 137-167ページ, あるいは新原道信「“境界領域”のフィールドワーク—サルデーニャからコルシカへ」『中央大学社会科学研究所年報』15号, 2011年, 1-24ページなども参照されたい。
- 3) カルチュラル・スタディーズ研究者のM.モリス(Meaghan Morris)は, 「理論とは……グローバルな英語的現象である。その産みの親は, トランスナショナルな出版社, 各地で点々と開催される国際会議, 北アメリカ方式の大学院」であり, 「職業教育を主眼として運営されているグローバル指向の新しい大学に」においても, この意味での「理論」が「リング・フランカ(共通語)」となっている(強調は筆者)。しかし, 「やがていつの日か, 市場原理にどっぷり浸かったその論理に対して, 積極的な不満を表明する人も現れるだろう」。だからこそ, 「特定の地域の文化の現場について, 経験的な問いを發すること(誰が, 何を, いつ, どこで, どのように, なぜ)であって, 現場検証から一般原則を導き出す作業を避け, 拒絶するのに, あえて理論家を気どる必要もない。私たちに必要なのは, 背後に横たわる大きなプロセスや縦横のネットワークを分析し, 自分がおこなったケース・スタディに意味づけをすることである」(Meaghan Morris, “Globalisation and its Discontents”, 1999 = 「グローバリゼーションとその不満」『世界』2001年4月号, 266-278ページ)と述べた。

メルッチとメルレルは, この「ケース・スタディに意味づけすること」とかかわって, 地域社会の“移行, 移動, 横断, 航海, 推移, 変転, 変化, 移ろいの道行き・道程 (passaggio)”, さらににはその“深層／深淵”を“大きくつかむ”ために, 構造分析を可能とするような社会科学的な概念とは別に, 「メタファー」がきわめて有効であると考えている。メルッチは, 前出の著書『プレイング・

セルフ』の「イントロダクション」で、「私たちの身に現在何が起きているのかを理解するには、様々な知がぶつかりあう十字路口に身をおく必要がある。多くの顔を持つ自己の現在を理解するためには、私たちが既に身につけている視点をずらし、関係のつらなりをつかみ取ったり、体験をくりかえし東ねたりすることが可能になるような、ものの見方を選ばなければならない。人間の行為は、相互作用のプロセスから成り、様々な可能性と限界のフィールドのなかで絶え間なくつくられるものであることが、より一層明らかになってきた。このことがよりはっきりしていくにつれて、惑星としての地球に生きていることの責任と応答力が、私たちすべての手に委ねられているということも明らかになってくる。したがって、私は、社会の関係性と諸個人の体験とを二つの軸とした、循環し、迂回していくような道筋を、本書で探究しようと思っているのだ」（訳書の7ページより、強調は筆者）と述べ、その実践として、第一章「日常の挑戦」を「時間のメタファー」という項目から始めている。

メルレルもまた、Alberto Merler, “Mobilitade humana e formação do novo povo / L'azione comunitaria dell'io composito nelle realtà europee: Possibili conclusioni eterodosse”, 2006. (=新原道信訳「世界の移動と定住の諸過程—移動の複合性・重合性から見たヨーロッパの社会的空間の再構成」古城利明監修, 新原道信他編『地域社会学講座 第2巻 グローバリゼーション／ポスト・モダンと地域社会』東信堂, 2006年, 63-80ページ)のなかで、地域社会の“衝突・混交・混成・重合”とひとの移動の動態を理論的メタファーによって解きほぐしている。

- 4) “コミュニティを基盤とする参加型アクション・リサーチ (CBPR)”は、メルレルの研究グループ FOIST (筆者を含む) が実践してきた方法であり (Alberto Merler, *Altri scenari. Verso il distretto dell'economia sociale*, Milano: Franco Angeli, 2010), K. レヴィン, O. ボルダ, P. フレイレ等の流れを汲む。W.F. ホワイトが『ストリート・コーナー・ソサエティ』の経験に基づき提唱した「参与的行為調査 (Participatory Action Research)」(William Foote Whyte, *Street Corner Society: The Social Structure of An Italian Slum*, Fourth Edition, The University of Chicago Press, 1993. (奥田道大・有里典三訳『ストリート・コーナー・ソサエティ』有斐閣, 2010年), ニューヨーク・ハーレムの公営団地でエスノグラフィック・フィールドワーク (EFW) を実践してきた二人の社会学者 T. ウィリアムズ (Terry Williams) と W. コーンブルム (William Kornblum) の方法と多くの共通点を持っている (Terry Williams and William Kornblum, *The uptown kids: struggle and hope in the projects*, New York: Grosset/Putnam Book, 1994. (=中村寛訳『アップタウン・キッズ—ニューヨーク・ハーレムの公営団地とストリート文化』大月書店, 2010年). メルッチは、著書『リフレクシヴ・ソシオロジーにむけて—質的調査と文化』(Alberto Melucci, *Verso una sociologia riflessiva: Ricerca qualitativa e cultura*, Bologna: Il Mulino, 1996)において、質的調査研究を中心とした多角的社会調査法の成果をとりまとめた。“療法的でリフレクシヴな調査研究”は、同書以後のメルッチ最晩年の企図を再構成した多角的調査方法である。メルッチの死後、メルッチの臨床社会学的研究を引き継いだアンナ夫人、フェラーラ大学教授 M. イングロッシ (Marco Ingrosso) と筆者は、“療法的な聴きとり調査の成果として、(1) “痛む／傷む／悼むひと (homines patientes)”のエスノグラフィー／モノグラフの蓄積、(2) 絵画・詩・舞踏などの創造活動の蓄積、(3) メルッチが残した講義テープのライブラリイを活用しつつ療法的でリフレクシヴな能力を身につけた調査者育成のためのワークショップ等を試みている。
- 5) “境界領域 (cumfinis)” — “テリトリーの境界領域 (frontier territories, liminal territories, terra 'di confine)’” “心身／身心現象の境界領域 (liminality, betwixst and between)” “メタモルフォーゼの境界領域 (metamorfosi nascente)” の概念については、新原道信「“境界領域”のフィールドワーク (2) —カーボルデ諸島でのフィールドワークより」『中央大学社会科学研究所年報』16号, 2012年, 67-98ページ (とりわけ「“境界領域”の概念図」) を参照されたい。

(1) “テリトリーの境界領域”	①地理的・物理的・生態学的・地政学的・文化的な基層 ②個々人の身体に埋め込まれ／植え込まれ／刻み込まれ／深く根をおろした基層 ③多方向へと拡散・流動する潜在力の顕在化を常態とする基層
(2) “心身／身心現象の境界領域”	
(3) “メタモルフォーゼの境界領域”	

- 6) 「深いところでの不可逆的な変化の連続」という「時代のパスージュ (passaggio d'epoca)」の認識と応答については、Alberto Melucci, “Sociology of Listening, Listening to Sociology”, 2000. (= 2001, 新原道信訳「聴くことの社会学」地域社会学会編『市民と地域—自己決定・協働, その主体地域社会学会年報13』ハーベスト社, 1-19ページ)を参照されたい。「変化に対する責任と応答を自ら引き受ける自由」については、新原道信「変化に対する責任と応答を自ら引き受ける自由をめぐって—古城利明とA.メルッチの問題提起に即して」『法学新報』第115巻, 第9・10号, 2009年3月, 697-722ページを, グローバリゼーションのもとでの“惑星社会の諸問題”の全方位的な展開については, 新原道信「いくつものもうひとつの地域社会へ」新原道信他編『地域社会学講座 第2巻 グローバリゼーション／ポスト・モダンと地域社会』東信堂, 2006年, 227-246ページ, 前出の“境界領域”のフィールドワーク(2)などを参照されたい。
- 7) “見知らぬ明日 (unfathomed future, domani sconosciuto)”については, 新原道信「出会うべき言葉だけを持っている—宮本常一の“臨場・臨床の智”」『現代思想 総特集=宮本常一 生活へのまなざし』39巻15号, 2011年, 158-169ページ, 新原道信「現在を生きる『名代』の声を聴く—“移動民の子供たち”がつくる“臨場／臨床の智”」『中央大学文学部紀要』社会学・社会情報学22号(通巻243号), 2012年, 69-96ページ, 前出の新原道信「“境界領域”のフィールドワーク(2)」などを参照されたい。
- 8) 立川砂川地区・大山団地を主たるフィールドとして, 原発・震災問題も含めた“惑星社会の諸問題”に応答するプロセスを〈大学-団地〉間で共有しつつ, 以下のことに着手している:
- (1) **調査研究グループの形成**: 初期シカゴ学派的な研究集団(現場主義, 小集団による問題発見, 多声の確保による調査研究アプローチの錬磨, メンバーの世代交代と智の継承などの側面を持った「調査者の知的コミュニティ」)を目指して「立川・大山団地プロジェクト」(「立川プロジェクト」)を構築する。
 - (2) **調査者育成プログラムの構築**: 研究代表者・分担者・連携研究者・研究協力者が担当する講義・ゼミ・研究会を有機的に組み合わせ, “惑星社会”論と二つの“探究／探求型社会調査”(CBPR/TFR調査)を習得しフィールドで実践する調査者育成のプログラムを中央大学内に構築する。
 - (3) **CBPR/TFR調査法の錬磨**: 大山団地自治会・避難者の方々との協力体制により初期段階のCBPR調査(フィールドの講義認識・分析, データ収集, フィールドでの諸活動への持続的参加システム構築等)とTFR調査をおこない調査研究方法の錬磨・修正をおこなう。
 - (4) **コミュニティ形成の条件析出**: 立川・大山団地を中心とした調査結果に基づき, 異質性を含みこんだ「3.11以降」の持続可能な(被災者個々人との関係性構築の方法と制度設計を含めた)コミュニティ形成の条件を析出し, CBPR/TFR調査の新規計画を準備する。
- 主要なフィールドとなる立川・大山団地は, 立川市北部の砂川地区, 立川基地の跡地に位置し, 2012年6月現在, 65歳以上890人(内, 一人暮らし300人), 車椅子12人, 聴覚障害者3世帯, 特別依頼訪問6世帯を抱えている(高齢化率27.8%)。2000年の三宅島噴火の避難者受け入れ経験を活かすかたちで「3.11」の直後, 避難者受け入れを開始(2011年3月28日に20世帯60人受入, 4月19日より新たに45世帯185人の受入, 9月に入り岩手県・福島県より10世帯・50人が入居), 出身地域は, 福島県(相馬市, 南相馬市, いわき市, 富岡町, 大熊町, 双葉町, 浪江町, 広野町), 宮城県(石巻市, 塩釜市, 仙台市, 南三陸町), 岩手県に及んでいる。避難者の80%以上は, 帰宅困難な高齢者か幼児連れの家族であり, 土地や地縁, 職場, 知人とも引き離されたという「出郷」

の問題に加えて、原発による強制避難／自主避難／津波での避難などの条件のちがいによる補償の格差の問題を抱えている。調査の実施にあたっては、中央大学側と団地側の連絡体制を緊密なものとして、諸活動への参加のなかで、住民・避難者の方たちの個別の状況と関係性の把握につとめ、団地側の要請によって、出来る限り臨機応変に調査計画を組み直していくことを調査研究の大前提として、調査時期・内容の再調整につとめている。

イタリア側とは緊密に連絡をとりあい、2011年6月の国民投票以後の状況に関する調査と並行して、2011年8月と2012年8月には、イタリアで、「3.11以降の日本社会」に関する国際セミナーを開催し、理解の共有に努めている（イタリアでの調査と研究交流については、新原道信「“惑星社会の諸問題”に回答するための“探究／探求型社会調査” — 『3.11以降』の持続可能な社会の構築に向けて」『中央大学文学部紀要』社会学・社会情報学23号（通巻248号）、2013年3月、47-75ページを参照されたい）。

- 9) 自己の“生存の在り方”の見直し（ways of living から ways of being にかけての意味の産出）については、新原道信「自らを見直す市民の運動」矢澤修次郎編『講座社会学15 社会運動』東京大学出版会、139-156ページおよび大門正克『『生活』『いのち』『生存』をめぐる運動』安田常雄編、大串潤児他編集協力『社会を問う人びと——運動のなかの個と共同性』岩波書店、2012年、168-196ページを参照されたい。
- 10) 『プレイング・セルフ』訳書の1-4ページと59ページより、「アイデンティティ危機」については、同書の第二章「いくつもの欲求、アイデンティティ、まともさ」と第三章「多重／多層／多面の自己のメタモルフォーゼ」を参照されたい。
- 11) 亡くなる直前のメルッチが故郷リミニでおこなった最後の講演での、社会の端／果てに棲息している微細な体験、毛細管現象のすべてに、社会の大きな変化の種子が含み込まれているということを考えつづけ、他者を理解しようとしつづけるという以下の言葉からもこの点がかがえる。

「私は明朗快活な楽観主義者の態度をとりつづけようとしてきました。しかしここでの楽観は感情的なものではなくモラルにかなった選択なのです。……対話をしつづけること、可能性を信じ続けることは、私たちがなすべき重要な使命であると考えています。それはなぜか？ なぜならば、私たちはいま、過去のいかなる時代にも見ることがなかったほどに、相互に衝突・混交・混成・重合し、多重／多層／多面化が極度に進行した現在という時代を生きているからです。過去においては、変化や革新、あるいは支配的傾向への異議申し立ても、数量に換算されていました。しかしいまや多数であることが必ずしも必要ではない世界へと突入しているのです。いまや私たちが暮らす相互依存的で相互作用的な世界においては、限定されたものやマージナルなものもまた／かえって効果的であったりもするからです。この認識が、私に楽観主義の態度をとらせる根拠となっています。数量がもはや有効性の唯一の規準とならないのであれば、私たちは予見しえない重要性を潜在的に秘めた個々の小さなことがらとかわることが出来ます。希望や楽観は決して幻想ではありません。私が楽観的なのは、深く社会学的な理由からなのです。社会のこうした転換によって、ごくごく小さな事件や、小さな集団や、ごくごく小さな行為などによって生み出されることがらから全景把握することを可能にしてくれます。現在の社会においては、ほんの小さな行為が重要な意味をもちます。というのは、この惑星の隅々に至るまで体験や出来事や諸現象を多重／多層／多面化させている相互依存の網の目にとって、それら小さきものこそが、根本的な資源となっているからなのです……」（以上、2000年故郷リミニでのシンポジウム「リミニ人の省察」での発言は、『プレイング・セルフ』訳書のvii、「アンナ夫人のはしがき」より）。

- 12) Alberto Merler, “Realtà composite e isole socio-culturali: Il ruolo delle minoranze linguistiche”, 2004. (= 新原道信訳「マイノリティ」のヨーロッパ—“社会文化的な島々”は、“混交、混成し、重合”する」永岑三千輝・廣田功編『ヨーロッパ統合の社会史』日本経済評論社、2004年、273-301ページ

ジ)を参照されたい。メルレルと筆者の間で錬成してきた島嶼社会論(現代社会を“社会文化的な島々(isole socio-culturali)”というメタファーから解説する理論)については、新原道信「島嶼社会論の試み—「複合」社会の把握に関する社会学的考察」『人文研究』21号、千葉大学文学部、1992年、151-179ページ、新原道信「深層のアウトノミア—オーランド・アイデンティティと島の自治・自立」古城利明編『リージョンの時代と島の自治』中央大学出版部、2006年、397-430ページなどを参照されたい。

- 13) このメルッチとメルレルの「エピステモロジー／メソドロジー」については、新原道信『境界領域への旅—岬からの社会学的探求』大月書店、2007年のなかで詳述している。メルッチとの協業については、新原道信「生という不治の病を生きるひと・聴くこと社会学・未発の社会運動—A・メルッチの未発の社会理論」東北大学『社会学研究』第76号、2004年、99-133ページを、近年のメルレルとの協業としては、Alberto Merler e Michinobu Niihara, “Terre e mari di confine. Una guida per viaggiare e comparare la Sardegna e il Giappone con altre isole”, in Quaderni Bolotanesi, n. 37, 2011, pp. 35-43, そして Alberto Merler e Michinobu Niihara, “Le migrazioni giapponesi ripetute in America Latina”, in Visioni Latino Americane, Rivista semestrale del Centro Studi per l’America Latina, Anno III, Numero 5, 2011, pp. 32-38などを参照されたい。

“未発の毛細管現象／胎動／交感／社会運動(movimenti nascenti)”については、前出の新原道信「自らを見直す市民の運動」、あるいは新原道信「惑星社会の諸問題」に回答するための「探究／探求型社会調査」を参照されたい。“メタモルフォーゼの境界領域(metamorfoosi nascente)”は、“時代のパスージュ(passaggio d’epoca)”とかかわり、そのような移行もしくは移転、“メタモルフォーゼ(変身・変異 change form / metamorfoosi)”が噴出する時期・瞬間としての“変転の時代(epoca di passaggio)”とかかわる。たとえばそれは、日常性がこわれて新たな枠組みが見えないなかで格闘せざるを得ない被災者や病者、各々の個性の奥深くを揺るがすような個別的な「事件」に直面し、徒手空拳で応答せざるを得ない瞬間である。そこでは、二者の“深層／深淵”における共感・共苦・共歎(compassione)の相互行為が、複数の二者性のつらなりとして、マングローブの根のひろがりのように現象していく“未発の毛細管現象／胎動／社会運動”と深くかかわる。

- 14) 古城利明「序」古城利明監修、新原道信他編『地域社会学講座 第2巻 グローバリゼーション／ポスト・モダンと地域社会』東信堂、2006年、iおよび同書の全体を参照されたい。本稿の議論は、2011年3月以降の古城利明先生との「対話」から多くの示唆をいただいている。
- 15) Robert N. Bellah et al., *Habits of the Heart: Individualism and Commitment in American Life*, The University of California, 1985 (= 1991年、島蘭進・中村圭志訳『心の習慣—アメリカ個人主義のゆくえ』みすず書房), pp. 357-369より。
- 16) “傷つきやすさ／攻撃されやすさ(vulnerability)”は、「dogmatic voice providing the ipsissima verba(独断的な言葉)」すなわち“ipsedixit(he himself said it)=権威をもったものからの独断・断定”をする「識者」の位置から“ぶれてはみ出す”ための方策となる。「女性と小説について講演を依頼されたウルフは、最初こう考える。結論は決まっている——女性は、もし小説を書こうとするなら、お金と自分自身の部屋をもたなければならない。ただ実際に講演するとなると、この結論を述べてそれで終わりにはならず、この結論というか命題をふくらませて、整合的な議論を組みたてねばならない。そのため彼女は、つぎのような方法をとる。『人ができるのはただ、なんであれ、自分のいっている意見は、自分はどうのようにして、いなくようになったのかをつまびらかにすることだけである』。自分の議論の楽屋裏をさらけ出すことは、ウルフによると、いきなり真実をしゃべることとは異なる行為である。おまけに、ことが男女の問題になると、結論をだそうものなら、かならず論争になってしまう。そこで、『聴衆のひとりひとりが自分の手で結論を導きだせるようなチャンスを、聴衆にあたえるにこしたことはない。そのためには、聴衆に、語り手の限界や、語り

手がいづく偏見や個人的嗜好をとくと観察してもらおうのだ。』戦術としてみると、これはもちろん武装解除であり、みせたくもない個人的事情をさらすというリスクもある。しかし、わが身の欠点をさらけだしつつ、整合的な議論を展開することによって、自分の話題にふさわしいとっかかりをウルフは手に入れることになった。彼女は、決定的な言葉をもたらす独断的な予言者としてしゃべるのではなく、知識人として、女性という忘れられた「弱き性」を女性にみあった言葉で表象するのだから」Virginia Woolf, *A room of one's own*, London: Hogarth Press, 1929. (= V. ウルフ, 川本静子訳『自分だけの部屋』みすず書房, 1999年, 5ページ); Edward W. Said, *Representations of the intellectual: the 1993 Reith lectures*, London: Vintage, 1999. (= E.W. サイド, 大橋洋一訳『知識人とは何か』平凡社, 1998年, 69-70ページ) より。

“探究／探求型社会調査 (Exploratory Social Research)” は、その“探究／探求の技法 (arti di ricerca/esplorazione, Art of exploring)” と“叙述／伝達の技法 (arti di rappresentazione, Art of representations)” の双方において、“自らの罪責／悪／弱さをつつみかくさず、道理のある話をする (chiacchierare con tutte le vulnerabilità e le ragioni)” ことが求められる。“探究／探求” と“叙述／伝達” の“技法”の問題については、新原道信「深層のヨーロッパ・願望のヨーロッパ・差異と混沌を生命とする対位法の“智”」廣田功・永岑三千輝編『ヨーロッパ統合の社会史』日本経済評論社, 2004年, 303-351ページ, あるいは新原道信「A.メルッチの『時間のメタファー』と深層のヨーロッパ『フィールドワーク／デイリーワーク』による“社会学的探求”のために」『中央大学文学部紀要』社会学・社会情報学 21号 (通巻 238号), 2011年, 27-65ページなどで論じている。

“探究／探求型社会調査 (Exploratory Social Research)” は、その“探究／探求の技法 (arti di ricerca/esplorazione, Art of exploring)” と“叙述／伝達の技法 (arti di rappresentazione, Art of representations)” の双方において、“自らの罪責／悪／弱さをつつみかくさず、道理のある話をする (chiacchierare con tutte le vulnerabilità e le ragioni)” ことが求められる。“探究／探求” と“叙述／伝達” の“技法”の問題については、新原道信「深層のヨーロッパ・願望のヨーロッパ・差異と混沌を生命とする対位法の“智”」廣田功・永岑三千輝編『ヨーロッパ統合の社会史』日本経済評論社, 2004年, 303-351ページ, あるいは新原道信「A.メルッチの『時間のメタファー』と深層のヨーロッパ『フィールドワーク／デイリーワーク』による“社会学的探求”のために」『中央大学文学部紀要』社会学・社会情報学 21号 (通巻 238号), 2011年, 27-65ページなどで論じている。

- 17) 「視点をずらす」試みの一例として、本稿冒頭のメルッチの言葉のなかでの対句は、「外的／内的」「公的／私的」でなく、「外的 (external)」と「私的 (personal)」という配置になっている。メルッチは、2000年5月の一橋大学での講演において、多重／多層／多面の自己の「行為の意味について“識る”」ための条件として、「体系化され統合された一般理論」ではなく、「現実に立ち向かう“かまえとしての理論”……リアルな現実をとらえるためのある種のフィルター」のような「ものの見方」の必要性を強調していた (同講演の記録は、新原道信「A.メルッチの“境界領域の社会学” —2000年5月日本での講演と2008年10月ミラノでの追悼シンポジウムより」『中央大学文学部紀要』社会学・社会情報学 20号 (通巻 233号), 2010年, 55ページにて紹介している)。「メタファー」そして「フィルター」は、“個々人の内なる社会変動”を把握するために不可欠な「エピステモロジー／メソドロロジー」となっている。
- 18) Johan Galtung, “Sinking with Style”, Satish Kumar (edited with an Introduction), *The Schumacher lectures*. Vol.2, London: Blond & Briggs, 1984, pp. 1-22 (= 耕人舎グループ訳『シュマッハーの学校—永続する文明の条件』ダイヤモンド社, 1985年, 3-28ページ) より。
- 19) Johan Galtung, *Globalization and intellectual style: seven essays on social science methodology*, 2003 (= 矢澤修次郎・大重光太郎訳『グローバル化と知的様式—社会科学方法論についての七つのエッセー』東信堂, 2004年) を参照されたい。

- 20) メルッチの未発の社会理論, “生体的関係的カタストロフ (la catastrofe biologica e relazionale della specie umana)” という問題把握および, メルッチの社会理論が持つ「明晰 (intelligibile)」と「難解 (obscure)」の間をどう理解するか (晩期の構想が「近現代社会の“深層／深淵”に迫る試み (近現代の“端／果て” “境界領域”の社会への構想) だったのではないか」という理解) については, 前出の新原道信「A. メルッチの“境界領域の社会学”」を参照されたい.
- 21) 文化人類学者の辻信一とクマールとの協業の成果である『サティシュ・クマールの今, ここにある未来 with 辻信一』ゆっくり堂, 2010年を参照されたい.
- 22) 同訳書の79ページより.